

読書会『吾妻鏡』を楽しむ

全譯 吾妻の鏡 一

水原慶二―監修 貴志正造―訳注 新人物往来社

目録第一 至巻第七 自治承四年 至文治三年

今日、弱冠一人、御旅館の御にす、鎌倉殿に謁してまづるべきの由を稱す。實平・家遠・義實等これを怪しむ、執事とくしに能はずとくしを移すところ、武衛みづからこの事を聞かしたまふ。年齢の程を思ふに、奥州の九郎か。早く御對面あるべしへれば、よつて實平、かの人を請す。果して義經よしのり主なり。すなはち御前に發進して、互に往事を談じ、懷物の涙を催す。就中なかつに白河院の御宇、永保三年九月、曾祖陸奥守源朝臣みなもとの、奥州において、將軍三郎武衡・同四郎家衡等と合戦を遂ぐ。時に左兵衛尉義光京都に候す。この事を傳へ聞きて、朝廷警備の當責を辭し、袈裟けさを殿上に解き置きて、ひそかに奥州に下向し、兄の軍陣に加はるの後、たちまち敵を亡ぼされはんぬ。今の來陣もつともかの佳例に協ふの由、感じ仰せらると云々。この主は、去ぬる平治一年正月、權中ごんちゆうの内において父の喪に逢ふの後、繼父一條大藏卿おほのぞのの扶持によつて、出家のために結髪むすむすに登山す。成人の時に至りて、しきりに會稽くわいけいの思ひを催し、手づから僧服そうふくを加へ、秀衡ひでたけの猛勢もうせいを頼りて奥州に下向し、多年を経るなり。しかるに今武術宿望を遂げらるるの由を傳へ聞きて、悲發せんと欲するのところ、秀衡ひでたけも

治承四年十月二十一日条
「義經奥州より來たり頼朝に謁す」

テキスト『吾妻鏡』は東国に生まれた武家政権の歴史を綴る。鎌倉幕府の動きや東国の情勢を始めとする朝幕関係や武士のあり方などを描いている。また、武家という家の形成を始めて記した、鎌倉幕府の初代源頼朝から第六代宗尊親王まで、將軍記の体裁をとる歴史書である。

読書会『吾妻鏡』を楽しむは2009年12月に24名のメンバーで発足し、現在は29名が6グループ編成で活動している。

定例会は毎月第3月曜日、13時30分から行う。講読頁を全員で音読することから始まり、担当グループによる要約、説明があり、研究発表で終わるが、適宜、質疑応答・意見交換がなされる。なお、読書会のテキストは貴志正造訳注『全譯吾妻鏡』全5巻を使用している。

読書のみならず、定例会終了後の懇親会、鎌倉の歴史探訪をはじめ、『吾妻鏡』にゆかりの地や寺社を訪ねるなど、文字どおり学習と親睦を同時に楽しめる会でもある。